

「シリアのアンティオキアに戻る」

2024年04月12日

パウロは、なお幾日もの間そこに滞在した後、きょうだいたちに別れを告げて、シリア州に向かって船出した。プリスキラとアキラも同行した。パウロは誓願を立てていたのので、ケンクレアイで髪をそった。一行がエフェソに到着すると、パウロは二人をそこに残して自分だけ会堂に入り、ユダヤ人と論じ合った。人々はもうしばらく滞在するように願ったが、パウロは聞き入れず、「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って、別れを告げ、エフェソから船出した。そして、カイサリアに到着して、エルサレムに上り、教会に挨拶してから、アンティオキアに下った。（使徒 18:18 ~22）

パウロは、人心が荒廃しているコリントに1年半も留まり、福音宣教に励み、教会を立ち上げた。一応の使命が果たせたと考え、宣教旅行に出発したシリア州のアンティオキアに戻ることを決意した。教会員たちに別れの挨拶をし、アンティオキアに向かって船出した。テント造りの同業者だったプリスキラとアキラ夫婦も同行した。パウロはプリスキラ・アキラ夫婦に深い信頼を寄せ、パウロの宣教活動を支援する関係を作っている。二人はどこにいても家庭を解放し、信者たちのために身を惜しまず奉仕する夫婦であった。

パウロはこの時、ある請願を立てていたのので、ケンクレアイで髪を剃ったと言う。この請願は「ナジル人の請願」のように思える。「ナジル人の請願」は、民数記6章に規定されている。誓いを立て、身を主に聖別する時、一定期間、酒類を断ち、頭髪を剃らない行為で、請願が満願になった時、剃髪する。ただし、剃髪するのは外国ではなく、エルサレムで行うと規定されている。すると、ケンクレアイで剃髪しているので、「ナジル人の請願」ではない。この時のパウロの請願が何であったかははっきりしない。パウロはあれだけユダヤ教の伝統から抜け出ていたのに、剃髪する伝統に従ったというのは極めて興味深い。使徒言行録16章には、テモテを同行させるため、ユダヤ人の手前、割礼を施したと書かれていた。「キリスト・イエスにあっては、割礼の有無は問題ではなく、愛によって働く信仰こそが大事なのです（ガラテヤ 5:6）」と説いているのに、テモテに割礼を施し、同行を認めさせた行為にも驚く。パウロはユダヤ教から自由であったが、やはり、身に沁み込んだ律法観があったのではないか。

コリントからエフェソに到着した。パウロはプリスキラとアキラ夫婦をそこに残し、自分だけが会堂に入り、ユダヤ人と論じ合った。エフェソはアジア州の首都で、総督府が置かれた大きな町で、パウロは以前から、宣教したいと望んでいた。エフェソの会堂に集まるユダヤ人たちは、パウロの言葉に興味を引き、しばらく滞在するように願ったが、パウロは「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って、滞在を断った。エフェソから船出して、地中海に面したユダヤのカイサリアの港に着いた。徒歩でエルサレムに上り、エルサレム教会を訪ね、信者たちに挨拶した。最初から同行したシラス、途中から加わったテモテもいて、パウロは宣教旅行の報告をしたであろう。喜んで信仰に入る人もいた。反対に激しく抵抗され、身の危険にも遭遇した。しかし、マケドニア州・ヨーロツパ宣教において、大きな収穫があったこと、殊に、異邦人に受け入れられたことに大きな希望が与えられたことであった。それから一行は、シリア州のアンティオキアに下って行った。第二宣教旅行が終わった。パウロの福音宣教にかけた情熱には、ただ敬服する。主イエスによる救いの確かさと喜びが駆り立てたのである。パウロは、ここでしばらく過ごしている。